

Vortrag 11.6.1995
 Ms. bearbeitet 8.1995
 abgeschrieben 17.8.1995
 1. Korr. 4.10.1995 - 6.10.1995
 2. Korr. Ende 10.1995
 publiziert Ende 3.1996
 (erhalten Anfang 4.1996, Vorlage
 für Photokopie Mitte 4.1996)

(94)

印度學佛教學研究第44卷第2号 平成8年3月

Yājñavalkya のアートマンの形容語と Buddha の四苦

後藤 敏文

JOURNAL OF INDIAN AND BUDDHIST STUDIES

(INDOGAKU BUKKYŌGAKU KENKYŪ)

Vol. XLIV No.2 March 1996

[88]

Edited by

JAPANESE ASSOCIATION OF
 INDIAN AND BUDDHIST STUDIES

(NIHON-INDOGAKU-BUKKYŌGAKU-KAI)

c/o Department of Indian Philosophy and Buddhist Studies
 Faculty of Letters, University of Tokyo, Japan

Yājñavalkya のアトマンの形容語と Buddha の四苦

後 藤 敏 文

1. Yājñavalkya が二回の対論を通じて Janaka 王に ātman の教説を明かす Brhadāraṇyakopaniṣad [BĀU] W 1-4 の最末尾に, ātman の修飾語として *ajāra*-「老いない」, *amāra*-「死なない」, *amṛta*-「不死の」, *abhāya*-「恐れない」の四語が現われる。*amāra*-「死なない」と *amṛta*-「不死の」とは一見同義に思われ、また、各語の必然性そのものについても、これまで特別注意が払われていなかったように思われる。当時の思想界の問題意識を背景に据えてこの点を検討し直し、更にその結果を Buddha の四苦と対比して、思想史的意義を探ってみたい：

(1) BĀU (Mādhyandina) W 4, 30-31 = ŚB XIV 8, 2, 30-31 *sā vā eṣā mahān ajā ātmā* | *'jāro 'māro 'bhāyo 'mṛto brāhmā. abhayaṃ vai janaka prāpto 'sīti yājñavalkyaḥ.*¹⁾ *sò 'hām bhāgavate videhān dadāmi mām cāpi sahā dāsyāyēti. || sā vā eṣā mahān ajā ātmā* | *ajāro (ātmājāro) 'māro 'bhāyo 'mṛto brāhmā. abhayaṃ vai brāhmā. abhayaṃ hi vai brāhma bhāvati yā evaṃ veda.* 「そのような、この、偉大な不生の ātman は、老いず、死なず、恐れず、不死であり、brahmaṇ なのだ。安泰(恐れなきこと)に、ジャナカよ、君は到達しているのだ」とヤーシュニャヴァルキヤは言った。(ジャナカは言った：)「この私は貴兄にヴィデーハの人々(＝国)を与えます。そして私をも一緒に、下僕として仕えるために」。そのような、この、偉大な不生の ātman は、老いず、死なず、恐れず、不死であり、brahmaṇ なのだ。brahmaṇ は安泰(恐れなきこと)なのだ。このように知っている者は、まさしく安泰である(ところの) brahmaṇ を自らのものとする²⁾のである。

mahān ajā ātmā が一組の主語であることは、直前の M[ādhyandina] 29 ~ K[āṇva] 24 により明らかである³⁾：

(2) *sā vā eṣā mahān ajā ātmā* | *'nnādō vasudānaḥ. sā yō haivām annādām vasudānaṃ veda, vindāte*⁴⁾ *vasu.* そのようなこの偉大な不生の ātman は食物を食す者、

Yājñavalkya のアートマンの形容語と Buddha の四苦 (後 藤) (95)

物(財産)を与える者である。そのような者として食物を食す者、物(財産)を与える者をこのように知っている者は、物(財産)を(自分のために)見出す。

2. ここに引用した帰結文から知られるように、Janaka 王が求めているのは、恐れ (*bhayā*)、しかも、死、ないし、死後自己がどうなるかについての恐怖からの開放である。この意味でも、沙門果経 *Sāmaññaphalasutta* の Buddha と *Ajātaśatru* の対話との類似性が注目される。DEUSSEN, *Sechzig Upanishad's des Veda* (1897~1938) 456 は BĀU IV 1-2 の、*brahmaṇ* は何であるかに関する諸師の教説を列挙する、いわば戯曲化された学説史の部分について、沙門果経がこれを手本とした可能性を述べているが、王が希求しているのは、要するに、死と死後への恐怖を克服して恐れのない境地に達することであり、会話の枠組みと目的の全体に於ても、両者の共通性が顕著である。

2.1. *ajāra*-, *amāra*-, *amṛta*-, *abhāya*- の四語はこの死後への恐れと直接に関連しており、単なる修飾のための語ではない。*ajāra*-が「老いない、歳を取らない」、*abhāya*-が「恐れない」を意味することは明らかである。*amāra*-は文字どおりには「死なない」であり、*amṛta*-が最も古い時代から⁵⁾「不死の」、「死というものをもそもも持たない」ことを意味していたと考えることも認められるであろう。⁶⁾ それならば、*amāra*-と *amṛta*-との関係はどう考えるべきであろうか。これを解く鍵は、*Upaniṣad* の議論が、死後の自己の在り方を焦点の一つとして進展してきたこと、その元を遡ると、*Brāhmaṇa* 期に特にはっきりと話題に上っている、天界における再死への恐れとその克服を巡る議論に帰着する、ということの中にあると思われる。⁷⁾ ここでは、この種の観念が明確に現われている、最も古いと思われる例を紹介しておきたい：

(3) *Maitrāyaṇī Samhitā* I 8,6 : 123, 18ff. *yó vai bahú dadivān bahv ījānō 'gnim utsādāyate, 'kṣit. tād vai tāsyā tād. ījānā vai sukṛto 'mum lokām nakṣanti. té vā etē yān nākṣatrāṇi. yād āhūr, jyōtir āvāpādi tārakāvāpādīti, té vā etē 'vapadyanta. āptvā sthitē tā idām yathālokām sacante yadāmūtaḥ pracyāvante.* ひとが、多く布施をなし、多く祭式を行なった者として、【自分の】祭火を(死によって)片付けるならば、【彼の *iṣṭāpūrtā*-祭式と布施の効力】は不滅なのだ。そのような(不滅の)それ(祭式と布施の効力)が彼のものとなるのだ。祭式を行なった善行者たちはかの世界へ到達するのだ。星座たちなるものは、そういうこの者たちなのだ。人々が「光が落ちたぞ。流れ星が落ちたぞ」という時には、そういうこの者たちが落ちているのである。【かの

/ 解

* cf. OLDENBERG
Gesch. d. Prosa 40 m. 1

□

(死にふても滅はる、
の意 → cf. 後藤
(原本) 純子, p. 54)

(96) Yājñavalkya のアートマンの形容語と Buddha の四苦 (後 藤)

世界に] 到達し、留まった後、彼らは、かの世界から去り出るや即ち、それぞれの世界に依じて、ここ (地上) へと従う。

2.2. Yājñavalkya は善い行為によって (*sādhukārī*, *pūnyena kārmanā*), (来世に) 善く (*sādhuh*, *pūnyah*) なる、つまり、よい状態に生まれ変わり、悪い行為によって (*pāpakārī*, *pāpena*), 悪く (*pāpah*) なる、という *kārman*-の説 (M N 4, 6 ~ K N 4, 5) を教えた後、*kārman*-の、従って輪廻の原因として欲望 (*kāma*-) を指摘する。引き続いて、欲望のないひとの場合は輪廻を超越する旨をいう：

(4) M N 4, 8f. (~K N 4, 6f.) *āthākāmāyamāno, yò 'kāmò niṣkāma ātmākāma āptā-kāmo bhāvati, nā tasmāt prāṇā ūtkrāmanty. ātraivā samāvanīyante. brāhmaivā sām brāhmāpy eti || tād eṣā ślōko bhavati | yadā sārve pramucyānte 'kāmā yè 'sya hṛdī sthitāḥ | ātha mārtyo 'mṛto bhavaty (bhoti) ' ātra brāhma sāmaśnute.* 次に、欲望していないひととは、[つまり] ひとが欲望なく、欲望を離れ、自己 (*ātman*) [のみ] を欲望し、欲望を達成した者となると、そのひとからは生体諸機能は出て行きません。ここ [にいる] ままで、統合 (回収) されます。[彼は] *brāhmaṇ* そのものな~~ら~~ずから、*brāhmaṇ* へ帰入します。それについて、次の頌が適用されます：「彼の心臓に位置している、全ての欲望たちが解き放たれるや即ち、すると、死すべき者は不死になる。この場合 (または：ここ、地上で)、彼は *brāhmaṇ* に到達しをせる」。

ここでは、*amṛta*-「不死、不死の」が「生きている者が死なないこと」ではなく、「一旦死んだ者が天界で再死することなく、従って地上に再生することがない」という意味で用いられている。当時の哲学的・自然学的議論の次元では、死後、ひとは一旦天界 (ないしは、それに類するよい存在) に生まれかわることが原則として考えられていた。上に引いた「悪い行為によって悪くなる」が意図しているのも、死後到達した天上等での状態を言うよりも、無論それとも関連するであろうが、そこでの再死を経て、次に地上に再生した時の状態を言うものと解釈される：

(5) BĀU-M N 4, 5 (~K N 4, 4) *tād yāthā peśaskārī | peśaso mātṛām apādāy-ānyān nāvataṛaṁ kalyāṇātaraṁ rūpāṁ tanutā, evām evāyāṁ pūruṣa¹ idāṁ śārīraṁ nihātāvīdyāṁ gamayitvānyān nāvataṛaṁ² rūpāṁ tanute, pītṛyaṁ vā gāndharvāṁ vā³ brāhmāṁ vā prajāpatyaṁ vā dāivaṁ vā mānuṣāṁ vānyēbhyaṁ vā bhūtēbhyaḥ³ ||*

[¹K *ātma*. ²K はここでも *kalyāṇataraṁ* をもつ; M では Ed. KāśīSS が同様 (二写本にこれを欠く旨注記). ³K ...*daivaṁ vā pr^o vā brāhmaṇ vānyēṣāṁ vā bhūtānām.*]

Yājñavalkya のアートマンの形容語と Buddha の四苦 (後 藤) (97)

それは、ちょうど、綾織りを織る女が綾織りの要素をほどいた後、別の、より新しい、より素晴らしい形を織るように、ちょうどそのように、この *puruṣa* はこの身体を打ち倒し、無知に赴かせた後、別の、より新しい形を【自らに】織ります、(すなわち) 祖霊に属する、または *Gandharva* に属する、または *Brahmaṇ* に属する、または *Prājāpati* に属する。または神々に属する、または人間たちに属する【形】を、または他の諸存在の為に【それぞれの形を】。

3. 以上のことを念頭において、Buddha の *dukkha*-「苦」を検討してみたい。初転法輪中に見られる四聖諦の教説の中で、苦諦は例えば次のように呈示されている：

(6) *Vinaya* I 10: I 6, 19 (cf. *SN* V 421: LVI 11, 5) *idaṃ kho pana bhikkhave dukkhaṃ ariyasaccaṃ, jāti pi dukkhā, jarāpi dukkhā, vyādhī pi dukkhā, maraṇaṃ pi dukkhaṃ, appiyehi sampayogo dukkho, piyehi vippayogo dukkho, yam p' icchaṃ na labhati tam pi dukkhaṃ, saṃkhittena pañc' upādānakkhandhā pi dukkhā*. また、比丘たちよ、苦という高貴な人々にとっての真実⁹⁾とは次のことである。生まれることも苦しい。老いも苦しい。病も苦しい。死も苦しい。好ましくない人々と一緒にいるのも苦しい。好ましい人々と離れるのも苦しい。望みながらも得られないこと、それも苦しい。纏めて、五つの取得の蘊(枝分)も苦しい。

老・病・死が苦しみをもたらすことは明白である。BĀUに於ける不老・不死・無畏と比較すると、Buddha の教説に於ては、人間の通常の人生で避けられない苦しみという、いわば市民的次先での見方に重点が置かれていると言える。検討を要するのは「生」*jāti*-である。我々の一般生活で、理性の芽生える前の出来事である誕生について、それを苦しみと捕えることは必ずしも当然とはいえない。後の仏教スコラ学の伝統では母胎中と誕生時に被る苦しみと解釈されているようであるが、⁹⁾ 老・病・死自体が *dukkha*-「苦しい」、つまり、「苦しみをもたらす」という本質を有することと対比させて考えると、誕生そのものが苦という本質を持つ、つまり必ず苦しみをもたらすものである、ということが意図されている筈であり、「誕生に付随する苦」は二次的問題と言わざるを得ない。そのような異なった次元の事柄を、インド自然学の、ある意味で頂点に達した時期に、Buddha が意図したとは考えられない。

4. 仏教でも、本来、輪廻の中での再生という意味で *jāti*-「誕生」¹⁰⁾ が言われていることは、改めて指摘するまでもない。D II 305, 6-9: XXII 18 は、苦の

(98) Yājñavalkya のアートマンの形容語と Buddha の四苦 (後 藤)

列挙 (例6に類似) に続いて、生一死一憂一悲嘆という一種の縁起の前提としての誕生という観点の下に、苦を与える誕生 (「生」) を定義している (S II 3は同一の文を十二支縁起の解説中に置いている、更に cf. Nidd II 147:257):

(7) *katamā ca bhikkhave jāti. yā tesamtesaṃ sattānaṃ tamhitamhi sattanikāye jāti sañjāti okkanti abhinibbatti khandhānaṃ pātubhāvo āyatanānaṃ paṭilābho, ayaṃ vuccati bhikkhave jāti.* そして、比丘たちよ、誕生とは何であるか。個々の存在者たちが、個々の存在者の種の中に、生まれること、生まれ成ること、降りてくること、転現する (…へと転じ至る) こと、[五] 蘊が出現すること、[認識機能の] 働く場 (六処) を受け取ること、これが、比丘たちよ、誕生 (「生」) と言われている。¹¹⁾

引用文中の *okkanti* (*avakrānti-*, *ava-kram*) は地上より上の世界にいる輪廻の主体が母胎に降りてくるという観念を基に造られた語であり、Pāli, BHS, 古典 Skt. を通じて確立した表現である。¹²⁾ 先に引用した (3)(5) もそれを前提としているが、更に例えば:

(8) BĀU-M II 4,3 = ŚB XIV 7,2,3 (~BĀU-K II 4,2) *tēna pradyotēnaiśā ātmā niṣkrāmati... tām utkrāmantaṃ prāṇo 'nūtkrāmati. prāṇam anūtkrāmantaṃ sārve prāṇā anūtkrāmantī. saṃjñānam evānvāvakrāmati, sā eṣā jñāḥ sāvijñāno bhavati. tām vidyākarmāṇi samanvārabhete pūrvaprajñā ca.* その閃きを通して、この ātman は (外へ) 出て行きます... (上へ) 出て行くそれに、氣息がついて (上へ) 出て行きます。ついて (上へ) 出て行く氣息に、全生体機能がついて (上へ) 出て行きます。[かれらが] 同意したところへと [ātman は] ついて降りて行きます。そうすると彼 (ātman) は認識する者、識別作用を備えた者となります。彼に、(前世 [までの]) 知識と行為とが一緒に後ろからつかまっています。そして、以前の (前世までの) 洞察力も [後ろからつかまっています]。

4.1. 更に、仏典から、輪廻の中での再生という意味で *jāti* 「誕生」が述べられている箇所を若干挙げる。基本的には、生の繰り返しを苦と認識しており、この世を、楽園と見て死を厭うとか、地獄や苦しみに満ちた下位の存在からの救済と見る視点は欠けている:

(9) D II 30: XIV 2,18 = S II 10: XII 10,2 (縁起説への導入部): *kicchaṃ vatāyaṃ loko āpanno, jāyati ca jiyati ca miyati ca cavati ca uppajjati (S upapajjati) ca. atha ca paṇ' imassa dukkhassa nissaraṇaṃ nappajānāti jarāmarañassa.* 災厄に、なんと、この世は陥っていることか。生まれ、そして老い、そして死に (滅び)、そして (天界等から) 転退し¹³⁾、そして (この世に) 現われる。しかもなお、この苦しみからの出口

Yājñavalkya のアートマンの形容語と Buddha の四苦（後 藤）（99）

を、ひとは洞察しない、老と死とからの。

(10) It 76 : § 83 (天人五衰) : *yadā bhikkhave devo devakāyā cavanadhammo hoti pañca pubbanimittāni pātubhavanti. mālā milāyanti, vatthāni kilissanti, kacchehi sedā muccanti, kāye dubbaṇṇiyaṃ okkamati, sake devo devāsane nābhiramatī ti.* 神が、比丘たちよ、神の群から転退する定めとなる時には、五つの前兆が現われる：花輪たちがしおれる。衣服たちが汚れる。脇の下から汗たちがわき出る。からだに容色の悪さが出て来る。神は自らの神の座に安らぎを見出ださなくなる、という【以上五つの】。

神々 (→ 外れ) [5]3

(11) D II 15 : XIV 1, 29 (誕生時の Buddha の雄牛の声 *āsabhi- vācā*) : *aggo 'ham asmi lokassa, jeṭṭho 'ham asmi lokassa, seṭṭho 'ham asmi lokassa, ayam antimā jāti, n' atthi 'dāni punabbhavo.* 私は世界の第一人者・最上者・最勝者である。これは最後の誕生である。今や、再生は存在しない。

(12) Sn p. 16 *khīṇā jāti, vusitaṃ brahmacariyaṃ, kataṃ karaṇiyaṃ, nāparaṃ itthattāyā ti abbaññāsi.* 生は尽くされた。梵行は住された。為されるべきことは為された。もはや（再び）このような状態（この世での生存）へと【至ることは】ない。と直観した。（～ M I 139 ...ti pajānāti; etc.）

(13) A II 15, -4^v (N 13) *sammāpādhānā marādheyyādhikhuno¹ te asitā jātim- arañabhayassa pārāgū¹ te tusitā jētvā māraṃ savāhanam te aneja¹ sabbam namucibalam upātivattā te sukhita (ti).* 正しい努力をする者たちは、死の定めを征服する。そのような執着しない者たちは生と死と恐れ彼岸に至る者たちである。部隊を引き連れた (cf. Sn 442) 死神に勝利して、彼らは満足している。彼らは動揺しない。魔物 (Namuci) の全軍 (cf. Nidd II 253 : 602) を凌ぎ越えて、彼らは幸福である。

(14) A II 12, 20^v (N 10) = II 52, 23^v (N 49) *sattā gacchanti saṃsāram¹ jātim- aranagāmino* 誕生と死とを歩み行く存在者たちは輪廻を¹⁴行く。

5. これらの例から知られるように、Buddha の四苦（生一老一病一死）中に挙げられる *jāti* 「誕生」も、本来、輪廻の中での再生を意味していたと理解するのが自然である。この、再生を苦と見なす考え方は、その否定として「再生しないこと」、つまり、「死後（天界で）再死しないこと」、すなわち *amīta-* を理想とする BĀU の考え方に良く対応する。即ち、以下の表のごとく、Yājñavalkya の ātman の形容語と Buddha の四苦とは、肯定：否定の関係で対応している。更に、敢て推理すれば、人生を苦とする世界観が強く打ち出されてくる背景には、そもそも天界での再死を巡る否定的議論から発展してきた為、という側面があるのではなかろうか。

(100) Yājñavalkya のアートマンの形容語と Buddha の四苦 (後 藤)

BĀU-M		BĀU-K	苦諦
ajāra- 「老いない」	—————	ajara- 「老いない」	jāti 「生」
amāra- 「死なない」	—————	amara- 「死なない」	jarā 「老」
abhāya- 「恐れない」	—————	amṛta- 「不死の」	vyādhi 「病」
amṛta- 「不死の」	—————	abhaya- 「恐れない」	marañam 「死」

○点線に

このように、初期仏典に現れる世界観、人生観は、古 Upaniṣad の生死観を受け継ぎ、その延長上にあると見ることができるが、BĀU における Yājñavalkya の ātman 論に見られるそれと比べ、輪廻に対する観念、思弁の一段階進んだ姿を示し、しかも、より普遍的に人間一般を対象とする性格が強い。しかし、あくまでも輪廻中の人間存在の在り方そのものを巡る思弁（縁起による世界理解）に中心があり、この世の中での出来事としての病、悩みなどは、どちらかというと言次的な議論対象に留まっていると見なしうる。¹⁵⁾

- 1) BĀU-K[āṇva] では、M の 30 には N 4, 23 の *eṣa brahmalokaḥ. samrāḍ enam prāpito 'siti hovāca yājñavalkyaḥ. so 'haṃ bhagavate videhān dadāmi māṃ cāpi saha dāsyāyeli* が対応し、最末尾の N 4, 25 に M の 31 に対応する *sa vā eṣa mahān aja ātmājaro 'maro 'mṛto 'bhayo brahmābhayaṃ vai brahma...* が置かれている。(K 24 はほぼ M 28-29 に当たる。) K 23 は M と異なり、Kaus. から作られた *prāpito* 「到達させられている」を持つ。18 Up. (Ed. LIMAYE-VADEKAR) は *samrāḍ* の後ろに | を置き、*enam* で新しい文を始めているが、*enam* は文の二番目に来るべき Enklitikon である；*samrāḍ* の前で文を区切るべきかと思われるが、Vok. の直後は事実上文頭であり、いずれにしても異例である；cf. Gotō Fs. Thieme (1995) n. 13。
- 2) 一般には「このように知る者は、まさしく安泰であるところの brahmaṇ になる」と解釈されているが、K. HOFFMANN Aufs. II 557-559 が指摘する *idāṃ bhū* の構文 (cf. Gotō I.Präs. 241 n. 528) と考えて、「brahmaṇ を支配する、管轄する、自らのものとする」と理解した。
- 3) 更に、M 23 = K 21 (Śloka) *ajā ātmā mahā dhruvāḥ* 「不生、偉大、堅固 (不動) の ātman」；K 22 *sa vā eṣa mahān aja ātmā yo 'yaṃ vijñānamayaḥ prāṇeṣu ya eṣo 'ntar hṛdaya ākāśas tasmiñ chete* 「この、生体諸機能のうちで識別機能よりなるものが、まさしくこの偉大な、不死のアートマンなのだ。【それは】心臓の内部にあるこの虚空、その中に横たわっている」(M は異なる；K II 1, 17 = M ib.: ŚB XIV 5, 1, 17 にも同じ文があり、同所が元かと思われる)。
- 4) 関係節に後続する主文が動詞で始まる場合、その動詞がアクセントをもつ (つまり文頭の価値を持つ) ことに関しては、例えば MINARD, *La Subordination dans la Prose Védique* (1936) p. 180f.: § 658 の諸例参照。
- 5) ただし、RV で *amṛta-* が具体的にどのように理解されていたかについては、必ずしも明らかではない。例えば、地上での 100 歳と死後の天界での永遠の生命とが合わせて考えられていたものかとも思われる。

Yājñavalkya のアートマンの形容語と Buddha の四苦 (後 藤) (101)

- 6) *ajāra-*, *amāra-*, *abhāya-* を、動詞の意味をそのまま受け継ぐ名詞を後肢にもつ限定複合語 (cf. AiG II-1 215) と解した。Pāṇini II 2, 116 は *ajāra-*, *amāra-*, *amitra-*, *amṛta-* のアクセントを (この順序で) Bahuvrīhi として教えている。アクセント位置をも含めてインドイラン祖語に遡る *amṛta-* (cf. av. *aməša-* < **ṛ-mṛto-*) は元来 Bahuvrīhi として作られたものであろう (cf. AiG II-1 226, 295)。アクセントの異なる *ābhaya-* は実体詞である (おそらく, Bahuvrīhi **abhaya-* 「恐れのない」からアクセント移動によって「恐れなきこと, 無畏, 安泰」)。
- 7) *punar-mṛtyu-* の語自体は ŚB, TB, JB, KB, ŚĀ などに現れる。その観念が明確に表明されている箇所については S. Lévi, La doctrine du sacrifice dans les Brāhmaṇas (1966) 95-97, P. Horsch AsS 25 (1971) 136f. 参照。更に、井狩彌介「輪廻と業」岩波講座東洋思想 6, 『インド思想』2 (1988) 276-306 参照。
- 8) K.R. NORMAN, Collected Papers IV 171-174 参照 (榎本文雄氏の教示による)。Vgl. ENOMOTO Oriens 35 (1996) 317
- 9) Cf. Visuddhimagga p. 498-501 (病 *vyādhi* についての解説を欠く)。仏教をも含めて、広く後の文献に見られるこの問題については、原実「生苦」、玉城康四郎博士還暦記念論集『佛の研究』(1977) p. 667-683 参照。母胎中と誕生時の苦とする解釈は、敢て想像するなら、死後地獄へ落ちるという観念がより一般的になった (ないし、議論の中により大きな比重を占めるようになった) 後代に、誕生そのものを苦と考えることが必ずしも明白に妥当しなくなったことと関連するかもしれない。
- 10) *jāti-* は Veda 語には現れず, Skt. では「生まれ」即ち「生まれつき, 本性, 種, 出自」の意味で用いられることが多い; Pāli 語で *jāti-* で表現される「生まれること, 誕生, 出生」という意味では、むしろ, Veda 語以来の *jānman-* が用いられる。後者の Pāli での用例は, PTSD, PTC によれば, Sn (Pārāyaṇa) 1018 *ādiṣṣa jammanam brūhi* 「生まれ (生年) に関して言え」のみである。
- 11) 以下, *jarā*, *maranāṃ*, *soko*, *paridevo* 等について叙述され, *vyādhi* は現れない。この、誕生に関する列挙に時間的・過程の意味が帰せられるとすれば, *jāti* には動詞 *jan* の「[父親が子として生まれてくるべき胎児] を造る」という原義の力が生きていたのかも知れない。次注参照。+ *janman-* von Empfängnis bis geboren werden Aid II 3
- 12) *ava-kram* については WINDISCH, Buddha's Geburt (1908) p. 31 参照。更に、医学書からの例: Caraka-Saṃhitā II 3, 3 *yadā cānayoḥ tathāyukto samsarge śukra-śoṇitasamsargam antargarbhāśayagatam jīvo 'vagrāmāti sātvasamprayogāt tadā garbho 'bhinirvartate* 「そして、両者 (健全な男女) のそのような状態での合体がなされた後、胎盤の内側に存する精液と血液との合体物へと、純質との結合に基づき、生命体 (命我) が降りて来ると、その時、胎児が転現する」。 *abhinirvartate* は例 (7) の *abhinibbatti* に対応する。
- 13) Pāli *caṇḍī*, *cuti-* については WINDISCH, Buddha's Geburt p. 30f. 参照: Skt.-Text からは MuṇḍUp, BhagGitā, MBhār から例が引かれているが、例 (3) に挙げた Maitr.Saṃh. の *pra-cyāvante* は注目すべき用例である。例 (10) をも見よ。
- 14) ひととは輪廻の外から輪廻へと赴くのではなく、すでに輪廻の中を流れ行くものであるから、「道の Akk.」と解釈すべきであろう。この用法は Pāṇini II 3, 5 に記述されているながら (*kālādhvaṇyōr atyantasaṃyoge* 「時と道とに完全に終わりまで関わ

(102) Yājñavalkya のアトマンの形容語と Buddha の四苦 (後 藤)

る場合に [Akk. が用いられる]]), 殆ど確認されていないように思われる (例えば DELBRÜCK Ai.Synt. 171: § 118 を見よ)。Rgveda 以来の用例については別に発表する予定である。

- 15) 従って, 生一死, ないし, 生一老一死以外の *bhaya-*, *vyādhi-*, *śoka-* の検討はまた別の主題である。各種のテキストに現われる, いわば, 苦悩の一覧表 (例えば, ChU VIII 4,1 Sanatkumāra の教説中の *jarā- mṛtyu-*, *śoka-*, *sukṛta-*, *duṣkṛta-*) の比較検討からも更なる視点が得られると思われる。

〈キーワード〉 Yājñavalkya, ātman, amṛta, 四苦, Upaniṣad と仏教。

(大阪大学教授, Dr.phil)